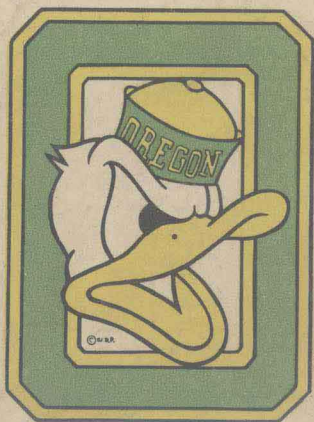


夫婦留學

アメリカ通信

倉田保雄 著



夫 婦 留 学

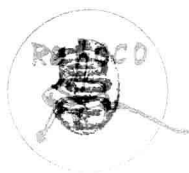
アメリカ通信

倉田保雄著

六興出版社

夫 婦 留 学

アメリカ通信



昭和28年12月20日 印 刷

昭和28年12月25日 発 行

定価 250 円

著 者

倉 田 保 雄

発行者

吉 川 晋

印刷者

草 刈 親 雄

印刷所

中央製本印刷株式会社

発行所

株式会社 六興出版社

東京都中央区日本橋蛸殻町1の12

電話 兜町 (67) 4161——4 番

振替口座 東京 92448 番

落丁・乱丁本は本社にてお取替へ致します

目 次

夫婦留学

アパート生活

アメリカ亭主気質

アメリカ女性点描

ところ変れば品変る

バス歩き八千マイル

留学生の生態

アルバイト体験記

アヒルの大学

大学生と社交

寄宿生活

三

一五

二七

三七

四九

七五

一〇六

一二五

一三七

二〇六

二三九

スラングと留学生

二四八

在米日系人

二六七

北米なまり

二七六

日系人出世頭

二八一

アメリカ人大衆と日本

二八四

格式ばらない生活

二九〇

アメリカ人と迷信

二九三

アメリカの鈴木さん、中村さん

二九六

バカヤローとゴメンナサイ

三〇〇

青い目のニコヨン

三〇四

米国社用族

三〇七

学生就職
クリスマス
三等船客記

三二〇
三二二
三一九

夫 婦 留 学

アメリカ通信

倉 田 保 雄 著

夫婦留学^{めおと}

夫婦でアメリカに留学したからといって、別にあちらで特別な待遇をうけたわけではなし、留学ということにおいては、一人で留学した人と変つたこともないのである。かえつて夫婦でいっていると、新婚旅行気分になつて遊びあるきがちで、勉強も独りものの留学生ほどにしないのが正直なところである。

しかし夫婦であちらに行つて、アパート住いをしながらアメリカ人の社会で世帯を持つていたのであるから、一年間ではあるが、アメリカおよびアメリカの社会のウラとオモテを「立体的」にみることが出来たのは、何といつても私達の夫婦留学の大きな収穫であつた。

夫婦でゆけばひとりでにアメリカ人の夫婦ものの友達が多くなり、女房は女房同志でそれからそれへと友達ができ、亭主もまた同じように友達ができ、ネズミ算的に増えるのである。またひとりものでは行けないような夫婦ものだけのクラブなどにも、時々招待されることもあり、アメリカの夫婦の実態というものがつかめた。

そもそも渡米留学生には私費留学生と政府交換留学生の二つがあり、後者は戦後のアメリカの対

日援助資金であるカリオア資金が使われたので、その名をとつてガリオア留学生として知られている。口の悪い連中に云わせると、会社の費用でよろしくたのしむヤカラを「社用族」というのであるから、私達みたいにガリオア資金で「めおと留学」するのを「ガリオア族」というのだそうである。

しかしガリオア族だと云つても留学生であるから、社用族のように飲めやおどれやとバカさわぎなどともんでもないことで、統計的に割り出された月々あたえられる生活費で、ほそぼそとやりくりをしなければならぬのである。

日米相互間の理解を深めるための人事交流計画、というのがガリオア留学制度の表向きの名称であるが、要するにアメリカをよく理解して、日本にアメリカの真の姿を紹介するというのが目的である。そのためには留学生は配置された大学にたてこもつて勉強ばかりしていたのではしようがないので、勉強は五分にして、あとは友達とつき合つたり旅行をしたりして、いわゆる「見たり、聞いたり、ためしたり」でゆかなくてはだめなのである。

しかし実際問題として、あたえられる月々の生活費は、地域的に上下はあるが、大体において下宿代と食費をのぞくとあとは二、三十ドルのタバコ銭が残るくらいであるから、友達とつき合うと云つても派手なことではないし、旅行をするに云つても大変なことである。とくにノンベの留学生にとつては「チュー」で安いと一杯やつていい気持になるというわけにも行かないので、相当

な痛手である。センタク屋の払いたつてワイシャツ一枚最低二十五セント（九十円）であるから馬鹿にしたものではない。

この点で夫婦留学だと、アパートに住んで、外食はしないから、食費は半分ですみ、センタクなども簡単なものはみな家でやつてしまふからとても経済的である。そこでこの「浮いた分」だけ交際費や旅行費の方に廻すのである。

新聞記者である私は、あたえられた一年の留学期間中に出来るだけアメリカにおける見聞をひろめることにつとめたので、大学の勉強の方にはあまり力を入れなかつた。

大学当局では、せつかく日本から来たのであるから、マスター（修士）の学位でもとつてゆけとすすめるのであるが、うつかりそんなことでもしようものなら電話帳みたいな長大な論文を書かなければならないし、そのためには一年の大部分を大学の図書館で過すことになり、けつきよくアメリカに来てアメリカを知らずに帰ることになる。

私の担任の新聞科の教授にしてみれば、日本からの留学生が自分のもとで勉強してマスターの学位をとつていつたとなれば、自分も鼻が高いというので、私に学位をとるようにさかんにすすめたのであるが、私が全然学位などに興味が無いとはつきり云つたので、とたんにいらまれてしまつた。日本を出る時からアメリカ各地を旅行して見聞をひろめることを留学の最大目的にしていた私はこの目的達成のためにアルバイトもしたしあらゆる努力を惜しまなかつた。教科書購入代金として

九十ドル（三万二千四百円）をアメリカにおける留学生世話機関からもらつていたが、教科書は図書館でまにあわせることにして、その九十ドルを旅行費にふりむけてしまつた。

するとある時、広告学のクラスで、教授が急に一週間後に中間試験をやるから教科書の第三十三章を読んでいといと云うので、試験の二日前になつて図書館に行つてその教科書と同じ本を借り出してきて、さて読もうと思うと三十二章までしかなくて三十三章は見当らない。よくみると教科書は同じではあるが、私が借り出したのは一九五〇年版で、教科書として使われているのは一九五二年版で、この版から三十三章がつけ加えられたことが分り大いにあわてたことがある。出版社と教授がタイアップしているのかどうか知らないが、何処の国でも教科書というものは学生に売りつけるようにできているらしい。

私達が留学していたオレゴン州立オレゴン大学には、共産圏を除いた世界各国から約百人の外国人留学生がいたが、夫婦できているのはインドから一組と私達で二組だけで、夫婦ともに大学にいつているのは私達だけであつた。インドからの夫婦はいわゆるインドの金持で、ダンナの方はのんびりと博士号をとるつもりでやつており、アメリカ人の学生達の間でもインドの金持夫婦として知られていた。それはそれでよいのであるが、困つたことには私達夫婦まで、彼等は金持扱いにしてしまつたのである。貧乏といわれるより金持ちといわれた方がいいには違いないが、そのつもりでおつき合いを求められたらたまつたものではない。いくら、私達は二人とも、政府の交換留学生で

やつとのことでアメリカへ来られたのだと説明しても、彼等はその時はああそうかと云うが、またすぐ忘れてしまつて「何故早く自動車を買わないのか」とか「何とか工夫すれば日本から送金できるよ」といふようなことを云いだすしまつである。

彼等、とくに西海岸地方に住むアメリカ人には「東洋人の移民は貧乏人、東洋人の学生は金持」といふ觀念が根強く植えつけられているらしいのである。全く金もないのに金持あつかいにされるのもつらいものであるとつくづく感じた次第である。

夫婦で留学してよかつたと思うのは、ダンスパーティーなどいろいろなもおしものに行くのにパートナ一の心配をしないで済むことである。この点でひとりものとなると、まずパートナ一を見つけて、それがうまくいつて彼女を連れ出すとなると、やれ晚めしだ、お茶だとおごらなければならぬ。しかもそれがアメリカ人の女の子であつたならば、レディ・ファーストの国であるから、従卒が部隊長を世話するようにつきまとわねばならないから、男尊女卑の風習になれている東洋人にとつては並大抵のことではない。まあ軍隊ではないから、少し位礼を失することがあつてもピンタをくらうことはないからいいようなものである。そこへゆくと夫婦でいるから、夕飯はちゃんと家ですましてゆくし、パートナ一は女房であるから、やたらにお茶などおごらずに済む、といつた具合で、何の心配もいらない、しごく便利である。

パーティーの入場券は大低男女一組につき三ドル（千八十円）位が相場であるが、これに女の子

をパートナーとしてきそつて行くと、夕食にどんなことしても四ドル（千四百四十円）近くいり、それにお茶をおぐると二ドル（七百二十円）はかかるので、ざつと見積つても十ドル（三千六百円）の「出血」である。ガリオア留学生にとつては一寸手のとどきかねるゼイタクであるし、また彼等の中には同じ十ドル使うなら飲んだ方がよいというので、手酌でビールとしけこむ連中が多い。もちろんこれは男子留学生の場合で、女子の場合は全く反対である。大体において外国人留学生の中で女子留学生の数は全体の二割程度であるから、ひとりでに「需要と供給の法則」が働き、パーティーなどとなると、男子学生間で「市場争奪戦」が起るくらいだから、一たび「お座敷」がかかれば女子留学生というのは一銭も費わずに充分にパーティーをたのしむことが出来るのである。

まつたくアメリカという国は女のために出来たようなもので、今までに女の大統領が出ないのが不思議なくらいである。一年間の留学期間を通じて、私はたえず私達は「夫婦」ではなくて「夫婦」であると思つていた。レディ・ファーストなる風習が余りにも徹底しすぎており、よくまああれでアメリカ女性の手足が退化しないものだと思ふことがあつた。郷にはいつては郷に従えと云うから、私も一応レディ・ファーストの原理にはしたがつて行動したが、女房を運動不足にするような行き過ぎた風習には従わなかつたし、また女房もそれは嫌がつていた。東洋的な男尊女卑もありよくないが、アメリカ式の女尊男卑も私には行きすぎのよう思へた。

私の在米中、一度だけ大びらにレディ・ファーストの原理が無視されたことがあつた。それは有

名な原子力スパイのローゼンバーグ夫妻が処刑された時である。夫が処刑されてから十分後に同じ電気イスで妻が処刑されたのであるから、死ぬ時だけはレディ・ファーストの例外がみとめられているらしい。

戦後の結婚ブームを反映してか、アメリカの大学には既婚の学生が男女ともに日本の大学に比べて非常に多い。私達のいたオレゴン大学にも各学期を通じて平均四千人の学生がいたが、そのうち既婚の男女学生は約八百人であつた。もつとも既婚者の多くはすでに大学過程を終えて、マスター（修士）の学位をとるために大学院で勉強している。

マスターをとるには前にも述べたように一冊の本ぐらゐの論文を提出しなければならないのが普通なので、既婚男子学生の場合は参考資料を集めたり、原稿をタイプで打つたりするのに女房を動員してやるのであつて、女房としては「内助の功」のみせどころである。しかし実際にはこの「めおとコンビ」もいつもスムーズに行くとは限らない。私達の住んでいたアパートの夫婦ものなどは、亭主がマスターの勉強に追われて女房を余りかまわず、論文の手伝いばかりさせるので、十日に一度位の割合で女房がヒスを起す。

すると亭主も資料調べなどでいらいらしているから「何おッ」ということになり、ここで戦闘開始となる。ドタンバタンと階下で派手にやるので、二階の私達の部屋にもひびいてくる。こちらも興味シンシンで、階下に行つて外からのぞいてみると、亭主のせつかく集めた資料らしい紙たばを、

髪振り乱した女房が片つばしからもみくしやにしている。亭主はこれまた半分泣き面で女房をおさえて、二人でもみ合っている。全くこうなると「内助の功」などあつたものではない、亭主にしてみればダイナマイトをかかえて論文を書いているようなものである。

しかし結局は、女房は亭主にとりおさえられてしまう。すると女房はマンガの本を二三冊つかんで自動車の中に逃げて「坐り込み戦術」に出る。一方亭主は、毎日教授などと連絡のため自動車を使わなければならないので、シブシブ自動車に乗り込んで、ここで「休戦会談」が成立するというのがお定まりのコースである。まことに面白い夫婦ゲンカの一コマであるが、昼頃ケンカが始つてもう夕方には二人でペタペタして歩いているのだから、「夫婦ゲンカは犬も喰わぬ」とは、いずこも同じである。

既婚の女子学生で大学院過程の勉強をしている連中の中には、歴史学で博士号をとろうとしているトコヤのおかみさんとか、心理学で修士号をとろうとしているミルク配達の女房などがある。このトコヤのおかみさんが私に語つたところでは、彼女はトコヤの女房ではつまらないから博士号をとつて、先生にでもなつて離婚するつもりだとのことである。

このように日本ではおかみさん階級に属する連中でも大学で勉強出来るのはアメリカにおける教育の一般化のためである。東部のハーバードとかエールなど有名大学をのぞいては、各州の州立大学などは原則として入学試験というものはない、誰でも簡単に大学に入ることが出来る。奨学金制